

視野広く、視座高い、次代を創る中小企業家になろう

「どうしたら生き残れるか」「経営者は孤独だ」「明日の手形資金の不足を従業員にも話せない」……。酒をくみかわし、悩みを語り合う中から、「ザイルが必要なんだ」と誰かがひとり言をいった。高く険しい山に登るには、パーティーを組んで、ザイルで身体を結びあって登るのだ。(「同友会二〇年の歩み」より)

戦後の中小企業運動の理念を継承し、「天は自ら助くる者を助く」の精神を自覚した経営者の集まりである中小企業家同友会。その全国三番目に創立されたのが、名古屋中小企業家同友会(現・愛知中小企業家同友会)です。今から六十年前の一九六二年七月九日、三十四名の名もなき中小企業家によるものでした。

六十年の歩みは、まさに激動の時代と歩みを共にするものでしたが、「人を生かす経営」――中小企業における労使関係の見解」を明らかにし、経営指針成文化運動や二十一世紀型中小企業の提唱などを通じて、自立した中小企業家として相互に支え高め合い、度重なる経済危機も社員と共に乗り越えてきました。

私たちの挑戦は、戦後日本の中小企業運動を超える、創造の中小企業運動に結実します。金融アセスメント法制定運動や中小企業憲章、中小企業振興基本条例の制定など、まさに「道なきみち」を切り拓くものでした。

私たちは今日、新型コロナウイルスのパンデミックの傷痕、史上かつてない超巨大格差、生命の存続をも脅かす気候危機、さらには国際社会秩序の揺らぎなど、「持続可能性の危機」に直面しています。経済社会のあり方のみならず、私たち自身の価値観や生き方の抜本的な転換が不可避です。そのあらわれが、「ビジネスと人権に関する指導原則」や「持続可能な開発目標(SDGs)」に代表される、人間尊重、人権尊重の企業や社会をめざす世界的合意です。

今こそ私たちが自身が、生命の尊厳に思いを致し、人びとの暮らしを守り安定させ、誰もが自らの能力を発揮できる社会、「人間が人間らしく生きられる社会」をめざす自覚が求められています。

一九九九年四月に公表した「九九ビジョン」は、「自立型企業づくり」と「地域社会と共に」という今日につながる二つの旗印を掲げ、「学ぶ」から「実践する」同友会への変革の一步でした。それから二十三年、「二〇二二ビジョン」では、これまでの「環境適応業」としての中小企業から、「環境創造業」としての中小企業へと飛躍する気概と中小企業家としての誇りを込めた「地域未来創造企業」を掲げました。

創立から六十年を迎えた中、改めて私たちが中小企業という存在、その意味と価値を問い直し、中小企業が地域の未来に希望と展望を抱く人々にとって、地域社会に対する信用と信頼を再生させていく拠り所となること――。これらが私たち中小企業家に課せられている使命であることを皆さんと確認し合いたいと思います。

今日この日から、新たなビジョンの実践を通じて、企業を維持・発展させ、私たちの生きる愛知(地域)のこれから(未来)を創り上げていきましょう。その先頭に立ち、愛知をけん引するのは私たち自身です。